光明寺だより

第90号
浄土真宗本願寺派
光明寺

〒793-0030　西条市大町550
TEL 0897-53-4583

心に残る言葉

浄土の門　西元宗助

この世は浄土ではございません
されどお浄土の門は
この娑婆に　この現実に
この現前の一念に
ひらかれています
念のために申しあげます
あの世には
もはや浄土の入口はございません

新春特別法座

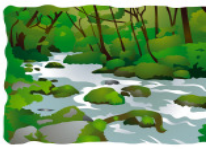
１月１２日（火）

午後４時

【講師】備後教区・光徳寺前住職

藤田徹文先生

一口法話



念仏者の智慧

教育者（長崎県教育長、高等学校長歴任）であり、また篤信の念仏者であられる竹下哲先生の著書『いのちに出合う旅』の中に次のようなお話が紹介されていました。

……

先日私はある若い奥さんから一通の手紙を頂きました。その手紙には八十五歳になるお姑さんと一緒に暮らしていかなければならない悲しみが、切々と綴られていました。お姑さんはことごとくに嫌味（いやみ）を言って、その奥さんを困らせるのだそうです。

私は思わずペンを取って返事をしたためました。

お姑さんとの問題、大変ですね。お気持ちはよく分かります。しかし、嫌味を言うのも、お姑さんの業なのですね。誰も好きで嫌味を言うものはいません。悲しい業縁がそうさせているのですね。

その「業」というのを、私は人生の舞台におけるその人の「役割」というふうに了解しています。人々すべてが、自分の役を一生懸命に演じている「役者」ではないでしょうか。舞台の役ですからみんなから好かれる役もあれば、憎まれる役もあります。それぞれの役を、みんなが汗を流して演じているのです。それを思えば本当にご苦労さまと声をかけたくなります。

あなたのお姑さんも、嫌味を言うという「憎まれ役」を一生懸命に演じているのではないでしょうか。どうかそういう目で、お姑さんを見つめなおして下さい。すると、また見方が変わってきて、あなたのお気持ちも少しは楽になるのではないでしょうか。

ひるがえって思えば清沢満之先生は、「如来はなんじがために必要なるものを、なんじに賦与したるにあらずや」とおっしゃっています。

この言葉の通り、「お姑さんの嫌味」もあなたに必要なのですね。あなたの心の目を開くために必要だから、如来は「お姑さんの嫌味」をわざわざ与えて下さっているのですね。だからあなたは、「ああ、そうでございましたか」と素直に如来のお与えをいただくことです。そしてまた、その嫌味をいただくことが、この人生におけるあなたの役目でもあります。その役に徹すること以外に、あなたの生きる道はありませんよ。

「気に入らぬ風もあろうに柳かな」です。柳は気に入らぬ風も、素直に受け止めています。だから柳はしなやかで、強いのです。気に入らぬ風が柳を育てているのです。

「念仏」は気に入ることも、気に入らぬことも、素直に受け止める力と智慧を与えて下さいます。お念仏を申しながら、賜った今日の一日を生きていってください……

……

お姑さんの嫌味に愚痴をこぼす奥さんに先生は「その嫌味はあなたの心の目を開くために必要なものです。だから、素直にいただきなさい」と仰っています。

この奥さんにすれば大変厳しい言葉ですが、これが念仏の教えによる解決方法です。

そうしてこの方法以外に、真の意味での解決はありません。

お姑さんの嫌味をいただくとは、手紙にあるように「ああ、そうでございましたか」と頭を下げることです。

しかし、それが中々出来ないのです。

何故出来ないのか？それは、彼女の心の中に「自分は間違っていない。自分は正しい。間違っとるのは姑の方だ」という思いがあるからです。

そこに大きな問題があるのです。

先生は、「あなたのその心が問題をこじらせているのですよ」と、教えているのです。

「自分は間違っていない。自分は正しい」という心の奥底にあるものを仏教では「我執」と言います。

我執とは「自分が一番かわいい」「自分は正しい」「自分のの思い通りにしたい」。「自分さえよければ」という心です。

何か問題が起きると、すぐに自分を正当化させ、相手の非を責める。しかしそれでもなお思い通りにならないと、今度は一変して被害者面をして「あんなことを言われた、こんなことを言われた」と不平不満の愚痴をこぼしていく。これが我執一杯に生きる私たちの姿です。まことにお粗末至極であります。

ここで大事なことは「そんな我執一杯に生きる愚かな我が身に気づく」ということです。気づけば「何と愚かな私なんだ」と頭が下がります。その頭が下がった時、私たちは愚かでありながら、愚かな自分を超えることが出来るのです。

しかし、自分の煩悩は自分で気づくことはありません。気づかせてくれるものがいるのです。彼女にとって、それが実はお姑さんなのです。

それまでお姑さんの嫌味を愚痴るばかりの彼女でしたが、先生の厳しい言葉に出会って自らの心を問い直したはずです。そうして「この私という人間は、そのようなお姑さんに出会わないと頭の下がらないほどしぶとい我を持った人間だった。まことにお粗末な嫁だ」と気づいたと思います。そうして「そんなお粗末な私の姿を知らせてくれたのは他でもないお姑さんだった。お姑さんこそこの愚かな私の心の目を開かすために此の世に来られた仏さまではなかったか」ということに目覚めるのです。その時彼女の心の目は開かれるのです。

お念仏の教えは、こうして憎悪の対象でしかなかったお姑さんが実は仏さまだったといただいていく、そんな尊い世界を与えて下さるのです。

また先生は、「その嫌味をいただくことに徹する以外に、あなたの生きる道はありません」と仰っていますが、これは仏教で説く「因果の道理」に従って生きなさいと教えているのです。

つまり、彼女の現在の人生（境遇）は、他人から与えられたものでもなければ、偶然出来たものでもない。彼女自らが選びとって出来たものなのだということです。ですから彼女の身に起きることはすべて彼女自身が自らの責任において果たしていかなければならないということです。他に責任を転嫁したり、相手を非難することは筋違いだということになるのです。

まことに厳しい人生観ですが、こうして我が身に起きる一切のことを引き受け（これを宿業を引き受けると言います）、自分が背負わねばならない荷物を背負って、精一杯生きていける身になったということが親鸞聖人の仰る助かったということだと思います。

そうして、我が身が背負う荷物は私に必要であったから与えられたのだと頂く時、清沢満之師の「如来はなんじがために必要なるものを、なんじに賦与したるにあらずや」という言葉を心の底からうなずくことが出来るようになるのです。

妙好人として名高い足利源左さんは、どんな時でも、「ようこそ、ようこそ　南無阿弥陀仏」と喜んでいかれたと聞きます。

「私の身の上にどんな辛いこと、悲しいことが起きてもかまいません。なぜなら、そのすべてが阿弥陀さまのお救いを喜ぶ大事なご縁ですから」と語っています。

「お姑さんの嫌味を素直にいただく」という生き方と軌を一にするものです。

まさに、「我以外皆我諸仏」であります

こうした念仏者の生き方を甲斐和里子女史（京都女子大創設者）は次のような歌にされています。

岩もあり　木の根もあれど　さらさらと
たださらさらと　水の流るる

川の水は、岩や木の根っこなどの障害物があっても、その障害を避けるのでもなく、また反対に突っ張るのでもなく、川上から川下へと自在に流れていく。念仏者もまたこの風情であるという歌です。

いかなることも素直にいただき、それを恵みとして生きていく。そんなことを教えるお念仏のみ教えは、障害だらけのこの人生を歩む私たちの大いなる灯火になるものです。

「常真法師顕彰碑」無事、移設！！

かねてより移設手続きを進めてきました「常真法師顕彰碑」の移設工事がこのほど無事完了をし、１０月２９日、当事業にご協力いただいた光明寺世話役（６名）の皆さんと共に、「顕彰碑・建碑法要」を勤修いたしました。移設場所は加茂川右岸にある湧水ゾーン公園内です。

今回の移設事業にあたっては光明寺の役員の方々が中心となって「常真法師顕彰保存会」〈会長・森本隆雄　事務局・安永省一　会計・石川博史　他会員２５名〉を立ち上げ、積極的に保存活動を展開していただいた結果、西条市教育委員会のご協力を得て、市有地である当該場所に移設先が決まりました。

今後、顕彰碑は市によって維持管理されることになり、当碑が末永く市の文化的価値のある碑として守り語り継がれていくことと思っています。

当事業にご尽力いただいた関係者の皆様方に心より御礼を申し上げます。

なお今回、当顕彰碑を西条市に寄贈したということで、市より感謝状をいただきました。

そのことが「広報さいじょう 12 月号」で紹介されました。（本紙８ページに掲載しています）

トピックス　「本願寺新報」に前住の長女が掲載

１０月２１日、西山別院をご巡回された専如ご門主との懇談会に出席した前住の長女が、少しばかり記事になりました。

「ご門主のお言葉に親しみを」

❷ 西山別院　京都市西京区　10月21日午後

午後からは、西山別院をご巡拝。門信徒など10人との懇談には、別院が併設する西山幼稚園の保護者が加わり、ご門主を囲んで、幼い頃から「ご門主は参加者と一緒に童謡を歌う」など、別院のあり方などについて語り合った。

保護者の1人で同別院門徒の北尾美香さんは「ご門主さまとテーブルを囲んでお話させていただき感無量です。幼い子を持つ親として、同じ目線でお言葉をかけていただき、とても親しみを感じました」と感想を語っていた。

同別院での式典は本堂で行われ、佐々木孝昭輪番がご消息を拝受。記念行事は法話と団・迎園館印の法話と講演が行われ、ご門主が「お参加者と一緒に童謡手を合わせる趣味大切なことを、別院のあり方などについて語り合った。」と歌われた。

茶道 薮内家燕庵
家元 京都市下京区西洞院正面下ル
信云場 東京港区本願寺第1伝道会館内
京都女子大学校舎（藤森館）内
京都野村美術館内
NHK京都文化センター
NHK大阪文化センター
NHK神戸文化センター
(075)371-3317
(03)3544-0551
(075)531-7399
(075)751-0374
(075)343-5522
(06)6343-2281
(078)360-6188
薮内家燕庵HP http://www.yabunouchi-ennan.or.jp

《本願寺新報の記事抜粋》

……保護者の一人で同別院の門徒の北尾美香さんは「ご門主さまとテーブルを囲んでお話させていただき感無量です。幼い子供を持つ親として、同じ目線でお言葉をかけていただき、とても親しみを感じました」と感想を語っていた……

★ご門主のご巡回は、今回（１０月２１日）を皮切りに来年７月まで全国６０か所を巡るご予定です。
これは伝灯奉告法要に向けての行事です

平成２８年度行事予定表

日　時	行事名	講　師
１月１２日（火）午後４時	新春記念法座	備後教区光徳寺前住・藤田徹文師
１月１６日（金）	正月参拝	
３月１５日（火）午前９時	涅槃会	
３月２３日（水）午後２時	彼岸会法座	大阪教区法栄寺前住・小林顯英師
８月１３日（土）１４日（日）	新盆合同追悼法要	
８月１６日（火）	お盆参拝	
９月１７日（土）午後２時	彼岸会法座	備後教区法光寺住職・季平博昭師
１２月０３日（土）午後２時	報恩講	
１２月３１日（木）	除夜会・元旦会	

★行事の変更、追加がありましたらお知らせいたします

彼岸会法座つとまる！

好天に恵まれた９月 27 日（日）午後 2 時より、季平博昭先生（尾道法光寺住職）をお招きして「秋季彼岸会法座」が開催されました。
今回は、「浄土真宗の生活信条」の最後の章―み仏の恵みを喜び互いに敬い助け合い社会のために尽くします―についてお話を頂きました。
がんのため余命半年と宣告された先生と親交のあったＭさんとの一年近くの交流を通して、限りある命を愛しみながら、周りの多くの人々の支えを糧として、み仏の恵みに包まれてあることを喜び、この世を尊く生き抜かれたＭさんのことをご紹介いただきました。“日常の日々の中にまだまだ宝物が隠されています。元気な時には見えなかった宝物。またお話します”これが先生と交わされたＭさん最後の言葉です。
法座の終りに、Ｍさんの生き方を歌にしたような「いのちの歌」（NHK 連続テレビ小説「だんだん」の主題歌）を聞かせてもらいながら彼岸会法座を終えました。

「いのちの歌」
（一番省略）
本当に大事なものは隠れて見えない
ささやかすぎる日々の中に　かけがえのない喜びがある
いつかは誰でも　この星にサヨナラをする時が来るけれども　　いのちは継がれてゆく
生まれてきたこと　育ててもらえたこと　出会ったこと　笑ったこと
そのすべてにありがとう　この命にありがとう……

趣味の広場

俳句を楽しむ（六十九）

森本隆を

平成27年もいよいよ師走を迎えました。皆さんにとってどんな一年だったでしょうか。毎年この12月号では年末の行事や風習、植物などについていろいろな俳句をみてきました。今回は少し暦を先取りして、もうすぐくるお正月の句を見ましょう。

先ず、古い年が去り、新しい年が来るという意味の「去年今年」という季語があります。

去年今年貫く棒の如きもの

という、昭和25年に高浜虚子が新春のラジオ放送用に頼まれて詠んだ句によって、季語として広く使われるようになったそうです。

平凡を大切に生き去年今年　稲畑　汀子

埋火の生きてつなぎぬ去年今年　森　澄雄

いつの時代も誰にとっても、無事に一年を過ごし、心静かに新しい年を迎える一夜こそ尊いもの、といった句でしょうか。

さて、「元日」「元朝」が新年最初の季語です。年の明けた初めの日、つまり一月一日の朝から夜までが「元日」であり、その朝を「元朝」と詠みます。いずれも、新年のめでたさ、清新さあふれる季語です。

元日の白息を見す赤子かな　岸田　稚魚

元日の夜は一灯に寄り合へり　宇咲　冬男

元朝や雀にもある珠の声　三谷　光枝

お正月らしくゆったりした気分で、日常のわずらわしさを忘れて詠んでいる三句です。昨日までの気忙しさも疲れもなく、家族ともども何となく一日が終ってしまう場合もありますが、おだやかに正月を迎えたことを喜びたいものです。

めでたい元日が終り一月二日。「二日」も新年の季語のひとつです。正月三ヶ日のまん中のいちにち，ふっと息をつき、最も心の落ち着く日かも知れません。近頃では世の男性諸氏もこの日は家に落ち着いて、朝早くからテレビの前に居て“箱根駅伝”を見てほぼいちにちを過ごす人も多いようです。

二日駅伝しごきて棒となる襷　辻　直美

竹の幹二日の夕日射しにけり　加藤三七子

静かなることが二日と思はるる　黒崎治夫

家族みなそれぞれに正月二日を過ごすわけで、昔はこの二日は仕事始めの吉日とされて、初荷、初湯、書き初めなどが行われたものでした。

明けると三日。俗にいう正月三ヶ日の最後の日。あっけないような、ちょっと寂しいような気分にもなります。人によっては明日の四日からは仕事、世の中が新しい一年の動きを始める日なので、正月気分を一新して気持ちの区切りをつける日でもあります。

長崎の坂動き出す三日かな　有馬　朗人

三日はや木綿のやうな風とゐる　野木桃花

一句めなど、「長崎」のところが「西条」でも「新居浜」でもよさそうな感じがして、正月気分から徐々に普段の気分に戻っていく、とても微妙な気分のただよっている句です。

お正月を区切りとして、三ヶ日以外に「松の内」という季語もあります。新年を祝う門松や注連飾りをしておく期間を松の内といいますが、西日本では十五日までが一般的です。

雪一日日和一日も松の内　原　石鼎

足袋底のうすき汚れや松の内　三橋　鷹女

どうか年の瀬を無事息災に過ごし、皆さんにとって、目出度くも清新で、すこやかなお正月をお迎え下さいますように。来年もまたよろしくお願いします。

合掌

住職書作品

【語句】　自然法爾

【意味】
自然と法爾は同義語で、自ずからあるがままにあるということです。
阿弥陀如来の救いは人間のはからいによって成立するのではなく、如来の本願の自ずからなるハタラキによって成立している。それは本願の法則としてそうなっているということ。

BOOK　本

『人生は価値ある一瞬』

発行所　PHP 研究所
著　者　大谷光真
定　価　１０００円＋税

本書は前門主になられて初めて刊行されたものです。

専門的な仏教用語は極力控え、生死の問題をはじめ、若い人たちが抱えがちな問題（育児や職場での悩み）や最近の社会背景にも関心を寄せながらご執筆されています。

「まえがき」で、「手っ取り早い解決法にはなりませんが、今さえよければ、自分さえよければという狭い思いを打ち砕く大切なはたらきを持った仏教を手がかりに、現代生活の様々な課題に、どう対処することが出来るかを考えてみました」と、刊行の思いを語っておられます。

大変やさしい言葉で書かれていますので、これまで仏教になじみのなかった人にも是非読んでもらいたい一冊です。

６章、59話で構成されています。

♥顕彰碑寄贈のことが「広報さいじょう」に掲載

加茂川改修の功績者

常真法師の顕彰碑が寄贈されました

10月6日、光明寺および常真顕彰碑保存会から、入江常真法師の顕彰碑が寄贈されました。

入江常真は江戸時代初期に加茂川改修に功績のあった人物で、顕彰碑は昭和3年に建立されたものですが、このたび寄贈者によってアクアトピア浦水公園内に移転、整備されました。

今後も郷土の先人顕彰を進めていく上で、有効に活用させていただきます。

▼アクアトピア浦水公園内に整備された顕彰碑

▲寄贈者には感謝状が渡されました

言葉のプレゼント

一生かかって夫婦になる

「光明寺だより」をご家族の皆さんでお読みください

次回発行予定…2月上旬

平成２８年度年忌早見表

「年忌繰り出し」を該当者に配布していますが、手作業のため見落とすことがあります。
必ず、ご自宅の過去帳で確認して下さい。

回忌	死亡の年号
1周忌	平成27年
3回忌	平成26年
7回忌	平成22年
13回忌	平成16年
17回忌	平成12年
25回忌	平成　4年
33回忌	昭和59年
50回忌	昭和42年
66回忌	昭和26年
100回忌	大正　6年
150回忌	慶応　3年
200回忌	文化14年
250回忌	明和　4年
300回忌	享保　2年

★9月27日（日）季平博昭先生をお招きして「彼岸会法座」が開催されました。（＊関連記事5ページ）

★11月1日（日）、住職夫妻に第2子が誕生しました。女の子です。美乃莉（みのり）と命名いたしました。長女（心）と大変よく似ています。母子ともに元気です。

★常真法師の顕彰碑の移設が無事終わりました。ご協力いただいた方々に厚く御礼を申し上げます。（＊関連記事4・8ページ）

★前住職の娘（京都在）が本願寺新報と月刊誌『大乗』に掲載されました。（＊関連記事4ページ）

★専如ご門主の伝灯奉告法要に伴う本山団体参拝が平成29年4月27日に決まりました。

★前門さまの新たなご著書「人生は価値ある一瞬」が刊行されました。（＊関連記事7ページ）